

イネミズゾウムシの耕種的防除と合鴨放飼

農業研究センター 農産園芸研究所 作物部

研究のねらい

近年、米に対する消費者ニーズは、良食味、安全、健康等の志向が高まっている。中山間地の水田は、土地条件から規模拡大やコスト低減には困難な点があることから今後の稲作経営としては、自然を活用し、付加価値を高めた有機栽培米等の生産が必要である。

そこで、有機栽培におけるイネミズゾウムシ対策と合鴨の放飼による雑草防除について明らかにした。

研究の成果

1. イネミズゾウムシの耕種的防除法としては、水管理を稲の活着直後(10日前後)から2日間程度(1日湛水2日落水)の間断かんがいとすることで常時湛水より幼虫や土まゆが減少し薬剤処理程度の効果がみられる。
2. イネミズゾウムシ対策としての間断かんがいによる水管理で、雑草の発生は多くなる。しかし、移植後30日程度からの合鴨放飼によって雑草は少なくなり防除効果がみられた。
3. 適正な合鴨放飼羽数は、10a当り10~15羽程度(移植後30日頃から出穂後15日頃までの放飼)と考えられる。
4. 以上の技術を組み合わせることで、イネミズゾウムシの被害が軽減され、雑草の防除が可能となり有機米栽培における生産性が安定する。
5. 留意点
 - (1)合鴨放飼は、合鴨の飼育、圃場周辺の電牧柵等が必要になる。
 - (2)ノビエ及びクログワイについては合鴨の除草効果が劣るため手取り除草が必要である。

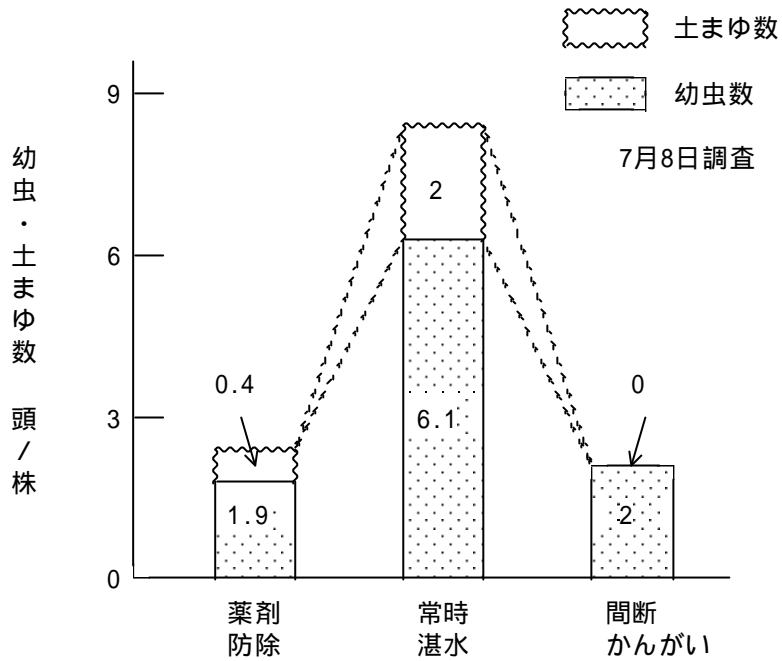


図1 イネミスリウムの幼虫及び土まゆの寄生数(平成3年)

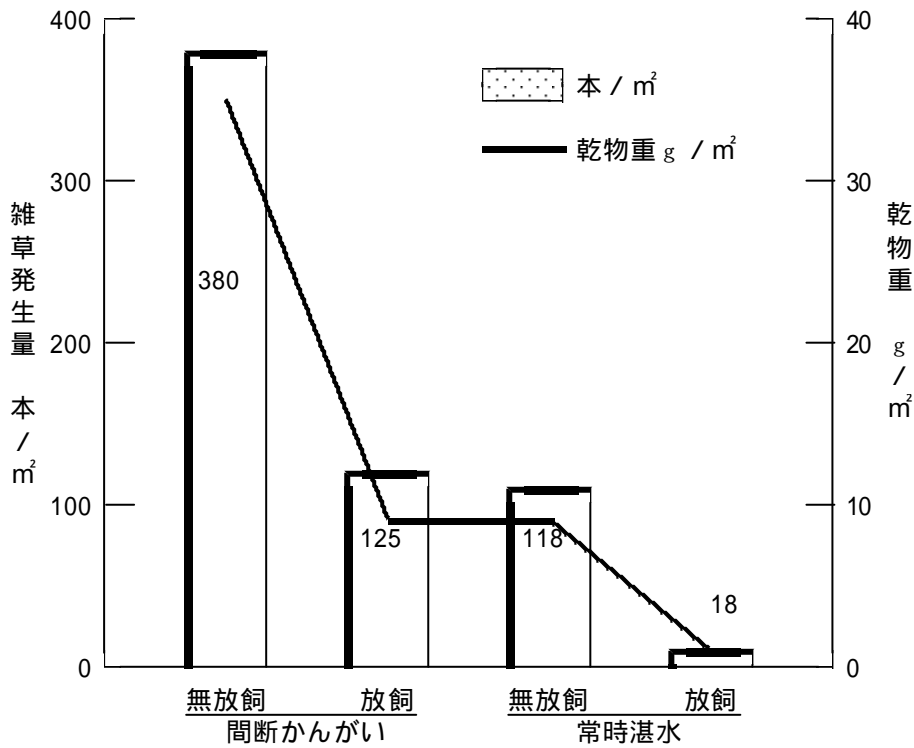


図2 水管理、合鴨放飼と雑草の発生量(平成4年現地試験)

注1) 移植後39日目調査

注2) 主要雑草名: コナギ、カタシロ、アノミ、ミスリウ等

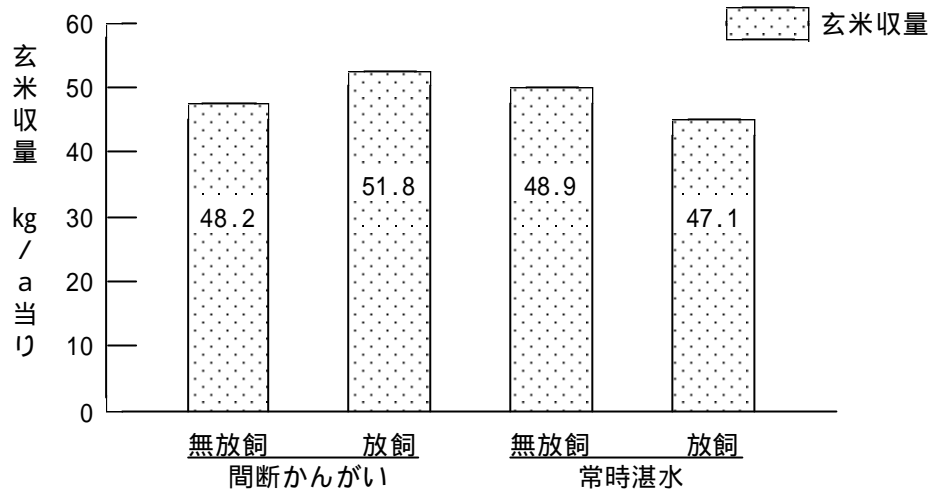


図3 水管理と合鴨放飼別収量（平成4年、5年現地実証）

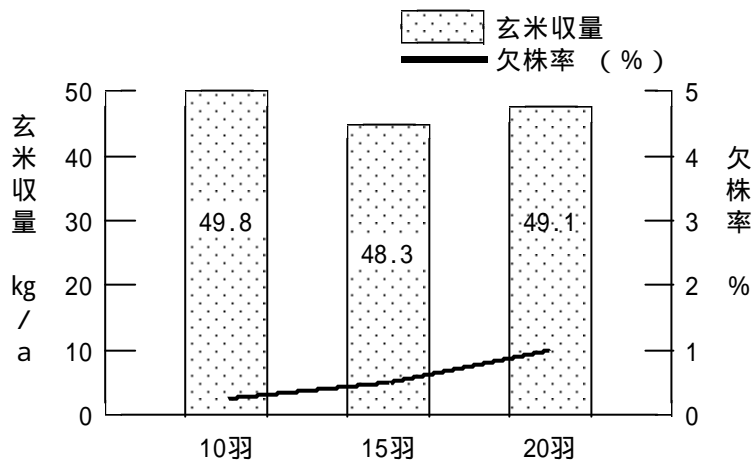


図4 合鴨の10a当り放飼羽数と収量・欠株率（平成5年）